



特集

農地を守るためにわたしたちにできること

私たちの食卓を支える農業。しかし、現在の農業は、農業従事者の高齢化や担い手不足など多くの課題を抱え、全国的に農地の担い手がいない遊休農地が増えてきています。大切な農地を次の世代へと引き継いでいくため、私たちにできることはあるのでしょうか。



図 農業委員会事務局 ☎23・5466



遊休農地とは

農作物の耕作や持ち主による維持管理がされていない農地のことです。農地は適切な管理を行わないと、草木が生い茂って荒れてしまいます。荒れた農地は、美しい景観を損ねるだけでなく、病害虫が発生したり、野生動物の住みかになったりと周囲に迷惑をかけてしまうことがあります。

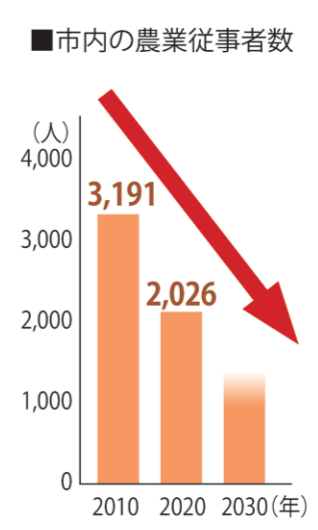


なぜ遊休農地が増えてしまったの？

市内の農業従事者(主に自営農の方)は、2010年には3191人いましたが、2020年には2026人となっており、10年間で約36.5%減ってしまったことになりました。2030年までには、50%近くまで落ち込むとの試算もされています。一方で、遊休農地の数は徐々に増えており、平成29年から令和4年までの間、30.4ha(東京ドーム約6.5個分)増え、345.7haとなっています。

地域計画が策定されます

農業者が減り、遊休農地が増加している今こそ、農地を後世へしっかり引き継いでいくことが大切です。そのためには、将来の農地利用のあり方について話し合い、目指す姿を具現化していくことが必要です。国は、市町村ごとに守るべき農地の範囲や担い手を定めた「地域計画」を策定することとしており、上田市では市内を6つの地域に分けて、策定に向けた準備を進めています。今後、農業者やJAなどの農業関係団体と話し合っており、農業の未来計画図とも言われるべき「地域計画」を作るための協議が行われます。



遊休農地が増えてしまった主な原因として、急激に進む高齢化と、新規就農者の減少などの担い手不足が挙げられます。特に若年層の比率が低下しているのが顕著であり、近年、企業の定年延長が進んだことから、退職後に農業を始める方が少なくなっただけでなく、注目されます。

農地が減るとどうなるの？

農地は、私たちに食料を供給するだけでなく、さまざまな役割を果たしています。農地がなくなると、これらの働きも失われてしまいます。



農地を守るために私たちにできること

農地を守るためには、農地を持っている方だけでなく、農地を持っていない方も農業に興味をもつことが大切です。

農地を持っている方は

- 自分の農地を荒れたままにしない
- 既存農家や就農希望者に貸し出す
- 山林化している農地などは他の地目に変更する

自分で管理できない農地はどうする？
一度荒れてしまった農地を復旧させるには、大変な労力が必要とされます。農作物を作らなくても、草刈りをするなど農地を適切に管理していく必要があります。農地を新たに受け継いで困っている方は、農業委員会(☎23・5466)までご相談ください。

農地を持っていない方は

- 遊休農地だからといってごみを捨てない
- 家庭菜園などにチャレンジし、農業に興味をもつ
- 子どもと農業体験会などのイベントに参加する



農地取得時の下限面積が撤廃されました

「農業経営基盤強化促進法の一部を改正する法律」により、令和5年4月1日から、農地取得時における「下限面積要件」が撤廃され、農地を持たない方も農地を取得できるようになりました。遊休農地を解消し、効率的に農業を発展させていくため、多様な方に農業に従事していただけるようになりました。

※「下限面積要件」は撤廃されましたが、農地を取得する際に、必要となる要件があり、全てを満たすことが条件となりますので、ご注意ください。



子どもたちに興味を持ってもらう ことから始めよう！



毎年、農業委員会では、未来を担う子どもたちの農業体験会を企画しています。この企画は、農業の担い手不足解消のために、「農業で楽しい思い出を作ってもらい、将来何らかの形で農業に携わるきっかけとなってほしい」という願いからスタートしました。

子どもたちは農業委員の指導のもと、熱心に農作業に打ち込み、令和5年度は春にジャガイモ、夏に米、秋に大根を育てました。

収穫した作物を味わい、おいしさを知ることでも体験会の重要なポイントです。

自分たちで育てた野菜は味も格別で、普段はお肉しか食べない子がおいしそうに野菜料理を食べる姿に、お母さんたちもびっくりしていました。

体験会のために用意した会場は、もともと遊休農地でした。農業委員が自宅の農業機械を持ち寄って荒地を耕し、自家製の肥料を混ぜるなどして準備をしました。

遊休農地を減らし、子どもたちの農業体験につなげるこの取組が、持続可能な社会を作る活動として評価を受け、信州SDGsアワード2023を受賞しました。



農業委員会とは
農業委員会は、農地法に基づく売買・貸借の許可、遊休農地の調査・指導などを中心に、農地に関する事務を行う行政委員会として市町村ごとに設置されています。農地保全のために、農業への新規参入を促し、担い手へ農地の集約を進めています。農業委員は、大小を問わず、農業を営んでいる方の中から選ばれます。

人々の食と健康を支える農業。就農する以外にも、家庭菜園や農業体験、地元の農産物を選んで食べるなど、農業との関わり方はたくさんあります。農家の皆さんに支えられて、私たちの食卓に美味しい野菜や果物が届けられていることに感謝し、私たち一人ひとりが農業に関心をもつことが大切です。


私たちみんなで農業を大切に
して、後世につないでいきましょう。

**遊休荒廃農地活性化
対策事業**

市内の遊休荒廃農地の解消を図る取組に対し、経費の一部を補助します。
詳細は市ホームページをご覧ください。

対象農地
■農振農用地区域内であること
■おおむね3年以上耕作されていないことなど

対象者
■対象農地を取得するまたは3年以上の利権を設定した農業者など


遊休荒廃農地活性化対策事業

☎ 農業政策課 ☎23・5122

さまざまな形で農地を担う方々 お話を伺いました



真田町傍陽の移住農業者

杉山さん



私はもともと農業高校の教員をしていて、果樹栽培に興味がありました。妻の出身地である真田に移住して、人に農地を借りながら果樹栽培を始めました。

上田市は日照時間が長く、昼夜の寒暖差が大きいなど独自の気候風土で、どんな作物でもよく育ちます。

農業人口は減少し続けていますが、以前よりも農地を購入したり、借りたりすることは容易になってきていると感じています。本気で農業をやりたい方にとって、良い環境が整いつつあるのではないのでしょうか。

農業の醍醐味は、自分で創意工夫を凝らした農作物を、喜んで味わってもらえることです。大変な面もあるけれど、苦勞した分、得られるものが大きいことが魅力です。

実家の農園を受け継いだ

小市さん



親からは、農業は稼げないかと反対されました。自分ができなくなったら廃園でいいと言った父を見て、小さい頃から行っていた畑に足を踏み入れなくなるとはもったいないなと思ったんです。時期になればリンゴや桃があるというのが当たり前前の生活だったので、それが無くなる想像がつかせませんでした。「じゃあ私がやってみよう。やってダメならそれでもいいから」という気持ちで始めました。

父と一緒に農作業をできなくなって2、3年くらいが経ちますが、私の代になってからもお客さんが増え続けていて、私のやり方は間違っていないと自信になりました。

市民農園で野菜を育てる

堀内夫妻



土に触れるのが大好きだったので、市民農園を借りて野菜を作り始めました。農園仲間と教えあって畑仕事をしたり、公民館へ集まってお茶を飲んだり、仲間づくりになりました。野菜を作っていると、お店の野菜を見る目も変わります。お店に並ぶ農家の方が直接持ち込んだ野菜を見て、作ってくれた方に感謝するようになります。

小さい子どもたちと一緒に農作業をするのも面白いだろうなと思います。子どもたちは虫がいると嫌がるけれど、虫がいるからこそ、この野菜はとてもしものだよという話もできます。市民農園には空きもありますし、ぜひ借りて野菜を育ててみてほしいと思います。

**市民農園で
野菜を育ててみませんか？**

☎ 農業政策課 ☎23・5122

市では、農作物の栽培を通じて農地の保全や農業に対する理解を深めていただくために市民農園を開設しています。現在、空き区画の利用者募集を行っています。皆様のご利用をお待ちしています。

